

## 『摂州合邦辻』

安永二年（一七七三）二月五日、大坂堀江市の側芝居で初演されました。

作者は菅専助と若竹笛躬。能「<sup>よろほし</sup>弱法師」から説経節の「しんとく丸」に至る世界の中へ、玉手御前という魅力的なキャラクターをあらたに作り上げていますが、住吉での毒酒や、寅の年月日揃った生血による病の平癒などは、享保十八年（一七三三）七月豊竹座初演の並木宗助作『<sup>ふたばれいじんあずまひながた</sup>莠伶人吾妻雛形』に拠っています。

上・下二巻の内、「合邦庵室」は下の巻。俊徳丸を追放して家督相続を狙う妾腹の次郎丸の策謀を背景に、住吉で玉手が俊徳に毒酒を勧めて色を仕掛け、やがて発病した俊徳丸が家出、玉手も後を追います。天王寺近辺の小屋に紛れた俊徳丸を、許嫁浅香姫が見つげ出し、次郎丸の追っ手を追い払った合邦道心が、二人を自分の庵室に匿うことになりました。俊徳を探す玉手御前は、父合邦のもとを訪れます。母が俊徳への思慕の噂を言い出すと、玉手は否定するどころか、取り持ってほしいと懇願する始末。俊徳を探し当てて激しく迫るので、堪えかねた合邦が玉手を刺すと、苦しい息の下から、秘めていた事情と本心を打ち明けます。俊徳丸廃嫡をめざす次郎丸から俊徳を守ろうとしたこと、しかし次郎丸の悪事を暴いては次郎丸が成敗されることになり、継母としてはそれも避けたかったこと。あらゆることを考え合わせ、自分の身を犠牲にしてすべてを救ったのだと打ち明けて、寅の年月日揃った自分の生き血を秘薬に混ぜて吞ませ、一同が繰る百万遍の数珠の中で、俊徳の病平癒を見届けた玉手は息絶えます。俊徳は、この地に玉手の母を住侶とする尼寺を建立することを誓い、それが今日まで残る月江寺となっているのです。

継母による継子への邪恋という主題は洋の東西を問わず、フェードルや愛護若説話にも見られ、元禄歌舞伎にも「継母事」と呼ばれる趣向のパターンがありました。玉手御前は年の離れた後妻なので十九歳か二十歳、俊徳丸が十七歳か十八歳という年齢構成。舞台上の玉手御前はもう少し年増作りに見えます（豊竹山城少掾は中年に造形すると明言）が、ともあれ、その背徳感と魔性の深淵をのぞかせておいて、一転、実はお家を守り、俊徳丸を守るための計略であったことが明かされると、物語の焦点は玉手と合邦という聖女と父に移ってゆきます。「弱法師」の世界を総合した近世的解釈の面白さというのみならず、深い罪業が浄められて、非日常的な法悦の中へ包摂されてゆくような段切れに至るまで、太夫も三味線も技巧の限りを尽くすような技法が目白押しです。文楽を代表する名曲の一つといっても、過言ではないでしょう。

親子三人の細やかな心情を語り分ける前半の繊細さから、後半は激情がぶつかりあう迫力の展開。玉手が浅香姫の帯をつかんで引きずり回したり、顔面を殴打したり、人形ならではの激しい表現（演者によって異なります）。た

まりかねた合邦が「グッと突っ込む氷の切っ先」から、声に慌てる入平をはじめ、姫、俊徳、母と、各人各様の思いが早い間の口捌きと、怒濤のような三味線によって語られます。

「道理じゃ道理じゃ、憎いはずじゃ」のマカンから、玉手断末魔の述懐になりますが、最後まで懐疑的なのが父合邦で、その合邦がついに納得するのが「オイヤイ、オイヤイ」という絶唱。「とりどり広げる数珠の輪の」から調子が上がり、三味線の説経風の音色の中で「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」の念仏が繰り返され、みなが繰り広げる数珠の中で玉手は鳩尾を切り裂き、肝臓の生血を鮑の盃に注いで俊徳丸に飲ませます。落ち入る玉手に取りつく「願衣此功德平等に死骸に取り付きすがり付き」と、なおも速めの口捌きの果てに、「庭に波打つばかりなり」で打ち寄せる最後の大波のような迫力の大落シになります。

「嘆きの中に母親は」から愁嘆を解きほぐすような改まった旋律で、母の落飾、月江寺や閻魔堂の謂われが由来譚的に語られますが、「平等利益」の後の長い合など、圧倒的な三味線の手が続きます。めくるめくような段切れは、十代目竹澤彌七に言わせると「かかあ天下を發揮して亭主を尻に敷く」ところで、「さすがの太夫もグロッキーになっていますので、三味線弾きは弾き語りの心で、どんどんと浄瑠璃を進行させます」とのこと。この壮大な物語の由縁は、今もなお残っている閻魔堂や月江寺、玉出の水や合邦辻という古跡など、天王寺周辺に留められているのです。

(児玉竜一)